

セッション4

私も一言

松岡 浩

(独)理化学研究所計算科学研究機構)



講演者紹介

名前：松岡 浩（まつおか ひろし）

現職：独立行政法人理化学研究所 計算科学研究機構 統括役

略歴：1979年 東京大学大学院工学系研究科原子力工学専門課程修士課程修了
1979年 科学技術庁 入庁(原子力局／原子力安全局)
1983年 通商産業省資源エネルギー庁
1985年 科学技術庁(原子力局)
1987年 日本原子力研究所(原子力船計画部)
1990年 科学技術庁(原子力局／金属材料技術研究所／原子力安全局等)
1995年 国際原子力機関(保障措置局)
1998年 日本原子力研究所(地球シミュレータ開発特別チーム)
2002年 同 (計算科学技術推進センター)
2002年 東北大学電気通信研究所(21世紀情報通信研究開発センター)
2004年 日本原子力研究所(計算科学技術推進センター)
2005年 日本原子力研究開発機構(システム計算科学センター)
2009年 理化学研究所 次世代スーパーコンピュータ開発実施本部
同 計算科学研究機構設立準備室
2010年 同 計算科学研究機構
現在に至る

私 も 一 言

松岡 浩

(元地球シミュレータ研究開発センター 現(独)理化学研究所)

三好先生のあまりにも力強い人間的魅力によって、人生が変わってしまった人は数多いのですが、私もそのひとりです。でも、それは間違いではなかったと信じています。

私が地球シミュレータ開発のプロジェクトチームにいたのは、平成10年からの約4年間。それは、振り返ると夢のような生命感あふれたとても充実した時間でした。プロジェクトの存続に関わる危機も何回かありましたが、チーム員の気持ちがひとつになって共通の目標をめざしてがんばり抜くことができました。密度が濃くて変化に富んだ映画のような日々が、あっという間に過ぎたという感じです。その間、三好先生の出張に頻繁に同行することができました。NECの工場は10か所行きました。また、入院された後も、1週間に2回のペースで病院に通い、連絡調整を行いました。この結果、職場以外でも、出張中の列車内、病室などで、折に触れて三好先生の人生哲学に根差したいろいろな言葉をお聴きすることができました。

三好先生の生き方・想いは、その茶目っけも含めて、我々の心の奥の魂にまで届く何かをもっています。この説得力はどこからくるのでしょうか？

ひとつだけ私がこうなってしまったエピソードをお話したいと思います。

“地球シミュレータ”が完成する前の年の夏、それは、三好先生が亡くなる数か月前になります。ある病院の病室で、“地球シミュレータ”が完成した後の運用体制の話をしていました。三好先生曰く、

「君の下には NEC の優秀なスタッフをつけた。君のやることは、彼らが心地よく仕事を続けられる職場環境を維持すること！それだけでいい、それに徹しなさい！」と。

少し時間を空けて

「でもそれだけじゃ、時間が余るよね。そうだ、あれ、あれおもしろいよ。あれ、やってみたら。」

実はその1年半前(2000年4月)、三好先生は、地球シミュレータ開発チームの数名に「この開発プロジェクトの次にやりたい好きなことを出してごらん！」と言われ、私はその翌日、3層のニューラルネットを利用して、その重みを変えることにより、任意の入力ビット列からどんな形の出力ビット列も計算できる演算器をもったプロセッサの開発をしてみたら？というアバウトな提案をしました。その件は、その日1日だけかなり議論して、その後はまったく一言もふれずに1年半が経っていたのです。三好先生は、そのことを覚えていてくれました。しかも、三好先生の言葉に対して、「あれは、もともと専門家ではない私の、素人の勝手な思いつきなので…」という、「何を言っているんだ。やる気さえあれば、何でもできる！」

病院のベッドに横たわっている人とは思えない迫力で真剣にそう言われるのです。まじめに私のことを考えて言われているのがわかりました。そして、それが、私にとっての最後の言葉になりました。思わず、「やってみます。」と答えてしまい、この約束を破るわけにはいかないまま、10年が過ぎて、今の私があります。トライし続けること、これが私の約束で、今もがんばっています。

いずれにしましても、三好先生は、「計算科学・計算機科学による人類社会への貢献」というすばらしい目標を教えてくださいました。そこには、こんな式や規則からこんな現象が現れるなんて！という深遠なサイエンスの驚き、まだまだ合わないな！現実には複雑過ぎる！でも、現実に何とか役立ててしまおうというエンジニアリングの醍醐味、そして、計算機システムを開発する人間とチームに生じる様々な人生ドラマ、があります。残りの人生をこれにかけても悔いはない！、みなさんもきっとそう思えます。

三好先生のもとで生きる喜びを体験してしまった人たちは、何年経ってもそのことが忘れられません。

このシンポジウムもそういう人たちが企画したということです。